只見短歌会　九月詠草

大塚栄一　指導

七十五歳になりきて招かれし敬老会にわれは感謝す　関谷登美子

米寿なる我を祝ひて兄弟の集へば逝きし父母の話も出づ　馬場　八智

減反の対策に蕎麦植うる田の多くなりきて風にそよぐも　新国由紀子

夕暮の雨の寒きにリハビリを休みて家の中を行き来す　古川　英子

十五夜の月に供ふる習はしも時代と共に廃れゆくなり　渡部ゆき子

割烹着まとふ案山子も立ちてゐる稔りし稲田の輝きのなか　小倉キミ子

余裕なく子を育て来し日々なれど時間気にせず孫と遊ぶも　渡部ヨリ子

改築の終へしわが部屋に抱へ来し本を娘ら手間取り並ぶ　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　十月例会

目黒十一　指導

母遺す木綿絣のちゃんちゃんこ　一穂

新米を掬い白を確かめる　都

稔り田や村に一軒パチンコ店　敦子

十五夜の供物に稲穂無きは淋しき　味代子

錦秋や宴盡きざる敬老会　吉児

老骨や出湯に謡谿もみじ　恒夫

みちのくの曲家消ゆる薄紅葉　邦男

雨の中厨の窓の青蛙　礼

昼寝する痴呆の母と暮らしてる　信

長雨に戊申の戦偲ひけり　順子

幟旗町に華やぐ秋祭　リウコ

花魁草何もないのに何なびく　修一

結果待つ院の待ち合い秋の雨

秋茄子の枯れそで枯れぬ畑中

明け方は涼しさすでに冬隣

晩秋や黄金が垂れる刈り残し

秋天や唐箕の口を山に向け

登高や流れ貫く伊南伊北

くろぐろと畝新しき露の朝

天日に広ぐ蕎麦の実かがやけり

ドアノブに一指のあとや秋湿り

感謝状仏間に並ぶ秋うらら

秋深く熊鈴鳴らす下校かな

折り詰めを前に笑顔や敬老日